

お金の流れが世の中を変える

# NPOの意味を支える仕組み

お金を生かすも殺すも人しだい——。

貯め込んで、ポツクリ死ぬ人あれば、肉親の相続争いが勃発、厄介なシロモノだ。いつそのこと、よきことに使おうとしている人と共有するのも手だ。

あるNPOバンクの軌跡を追った。

ジャーナリスト

## 檜田秀樹

●かしだ・ひでき 1959年、北海道生まれ。岩手大学卒業。大手マスコミが報じない環境問題、社会問題を追い続けている。

現在、日本には十四のNPOバンクが活動を展開している。出資金合計額は六億円、累計融資額は二十七億円超となった。

「未来バンク事業組合」が設立されたのは一九九四年だが、NPOバンクを設立しようとの機運が高まったのは二〇〇〇年代の前半。未来バンクを見本に、北海道、新潟、長野と、NPOバンクが設立されていった。

私が注目していたのは、二〇〇五年に愛知県でNPOバンクを立ち上げようと奔走していた二十代の青年、

木村真樹さんだった。大学卒業後の〇一年四月から一年半、愛知県の地方銀行で中小企業への融資担当として働いていた。資産運用のアドバイスも行ない、事業が軌道に乗れば相手先から感謝されることにやりがいを感じ、「金融は社会を支える」と

実感した。

### 「構造」を変える仕事

〇二年九月末に銀行を退職。マニュアルに頼れば無事仕事をこなせる毎日ではなく、「自分の責任でリスクを引き受けられるような働き方をしたい」と思ったのだ。

NPOのスタッフを目指し、その

ための半年間の研修を受ける。約一カ月、インドの村でフィールドワークを体験した。水不足に苦しむ村。近くの山には木がないので植林をしたり、水を節約できる料理を普及したりといった活動をする。「この活動が転機でした」と木村さんは振り返る。

「村のすぐ近くに外国資本のコラーの大きな看板があるのに、生活用水に不自由する村に政府も企業も何もしない。経済システムの『暴力の構造』だと思ったんです。僕がやるべきは現場での活動よりも『構造』を変える仕事に就くことだと気づいたんです」

〇三年春から、木村さんは、国際的な青年NPOである「A SEED JAPAN」(ア・シード・ジャパン。正式名称「青年による環境と開発と協力と平等のための国際行動」)の事務局長に就任

する。そこで手がけた二つが、環境や社会に負荷をかけない貯金や投資をテーマにした、の「第一回エコ貯金フォーラム」(〇四年一月)だった。

刺激的なイベントだった。パネリストとなった「未来バンク」田中優理理事長、「北海道NPOバンク」杉岡直人理事長、「女性・市民コミュニティバンク(WCA) 向田映子代表、「東京コミュニティパワーバンク(CPB)」坪井眞理理事長、「NPO夢バンク」田中秀一郎理事など、NPOバンクの「頭取」たちの言葉からは、新しいお金の流れが世の中を変える可能性を感じさせた。

田中さんの「口で戦争反対と唱えても、お金を銀行に預ければ加害者になる」との言葉には、元銀行マンであっただけに衝撃を受けた。「この問題をずっとやると決めたいです。預金者も自分の貯金に関心を

持ち、既存の金融機関も環境や社会に関わるように変わっていけばいいな、と」

二〇〇五年十月。木村さんは、愛知県でNPOバンク「コミュニティ・ユース・バンク momo」(以下、momo)を立ち上げた。

その少し前、私は、木村さんに「NPOバンクで何を目指すのか?」と尋ねた。答えは明確だった。

「融資件数の多さとか、どのくらい融資額を伸ばすかは問題ではありません。僕は『仕組み』を作りたい。融資には東海三県の金融マンを巻き込んで、採算性だけではなく、事業の社会性も審査の対象にするなど、NPOへの審査と一緒に学びたいと望んでいるんです。同時に、僕たちも、いろいろな金融マンから審査のノウハウなどを学びたい」

それから九年。momoの事務所